当院における過去5年間の院内発生AmpC型βラクタマーゼ産生菌についての調査

◎奥田 千晶[1)]、金澤 雄大[1)]、石藤 宥人[1)]、岡本 優美[1)]、新井山 育未[1)]、堀内 弘子[1)]
八戸市立市民病院[1)]

【はじめに】AmpC型 β ラクタマーゼ産生菌（以下AmpC）による感染症においてしばしば抗菌薬の選択に苦慮する場面に遭遇する。そこで今回当院の過去5年間における院内発生AmpCについて調査し、若干の知見を得たので報告する。

【対象】2014～2018年度に一般細菌培養を目的として提出された検体113,599件。

【方法】入院後48時間以降に検出されたものを院内発生AmpCと定義し、同一患者の同一菌種は年度ごとに重複処理をした。判定にはAmpC/ESBL鑑別ディスク（関東化学）ボロン酸阻害試験を用いた。

【調査項目】①AmpCの検出状況②菌種別検出数③診療科別院内発生率④AmpC検出までの入院日数⑤検出前抗菌薬投与歴、の5項目について年度別に集計した。

【結果】①AmpC総検出数：732株、院内発生AmpC検出数：530株（院内発生：72.4%、持込：21.4%）。調査期間内の入院患者は67,585名。院内発生率は0.78%で、2017年度までは減少傾向であったが2018年度では増加した。②いずれの年度においても*Enterobacter cloacae*、*Klebsiella aerogenes*、*Citrobacter freundii* complexの順に多くこれら3菌種が78.5%を占めた。③心臓血管外科2.33%、外科2.02%、救命救急科1.41%の順に高かった。④中央値は20.5日（2～558日）であった。⑤検出前3ヵ月間に抗菌薬投与歴があったのはのべ459人で86.6%であった。

【考察】当院の院内発生AmpCは染色体性AmpCを保有する菌種が多く抗菌薬投与歴のある患者が多いことから、抗菌薬使用によって耐性が誘導され、AmpCが過剰産生されたと考えられる。検出数の多い*Enterobacter* sp. *Citrobacter* sp.などは医療関連感染において重要な菌であり、院内感染対策も留意すべきと思われた。

【結語】今回、院内発生AmpC型 β ラクタマーゼ産生菌について調査した。今後も他の耐性菌を含めた動向を細菌検査室から発信していき、より一層、抗菌薬適正使用や院内感染対策に貢献していきたい。

連絡先 0178-72-5111（2430）